

2025 年 4 月 20 日（日）復活大祭朝礼拝説教

『死は勝利に飲み込まれた』井上隆晶牧師

I コリント 15 章 50～58 節、マルコによる福音書 16 章 1～8 節

①【墓石はすでに取り除かれていた】

今日は復活祭です。キリスト教の最も大切な祭りです。キリストは金曜日に十字架にかかり、死んで葬られ、三日目の日曜日の朝に復活したので、日曜日がお休みになりました。それほど世界の歴史に影響を与えた出来事でした。何があったのか聖書を見て見ましょう。

日曜日の朝早く、日が出るとすぐにマグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメという弱い立場の婦人たちがイエス様の墓に向かいました。特にマグダラのマリアは以前、イエス様によって七つの悪霊を追い出してもらった人（ルカ 8：2）です。男の弟子たちは皆、イエス様を見捨てて逃げてしまい、また当局に捕まるのを恐れて家の中に隠れて何も行動を起こすことをしませんでした。しかし婦人たちは違いました。力も地位もない彼女たちは、せめてイエス様の遺体に香油を塗ろうと思って朝早くに墓にやってきたのです。彼女たちは「**誰が墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか**」（マルコ 16：3）と話し合っていました。墓の石はものすごく大きくて重く、数人の男がいなければ転がすことはできなかったからです。ところが目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてありました。このことが私たちに教えているには、**私たちは強くなったら人を助けようとか、豊かになったら与えよう、行動を起こそうと考えますが、そうではなく今どんなに弱くても、貧しくても、今の自分に出来る事をすぐにしなさい**ということです。そうすれば神が必要な門を必ず開いて下さるという事です。小さな勇気、決断、愛を献げる人が、神の栄光を見ることが出来るのです。

●三浦綾子さんはカリエスに罹り、長い間入院生活をしていましたが、洗礼を受けるやいなや病室を集会所のようにし、病人たちに伝道しました。病人でも伝道はできます。祈ることは出来ます。捧げる事もできるのです。キリスト教に必要なのは愛の伴う実践なのです。

②【死を滅ぼすためにきたキリスト】

墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、彼女たちはものすごく驚きました。この若者は天使でしょう。彼は婦人たちにこう告げました。「**驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。ご覧なさい。お納めした場所である。**」（マルコ 16：6）これはどういう意味でしょう。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜していると天使はいいました。ナザレのイエス、実際にいた歴史上に人物です。ナザレで育ち、十字架で死んだ人間です。人は誰でも自分の知っている人を捜すものです。知らない人は捜すことは

できません。でもイエス様には人間の知らないもう一つの顔があるのです。それは神としての顔です。天地が創造される前からおられ、天地を創造し、人間を自分に似せて創造した方がキリストです。しかし自分が造った人間が罪を犯し、死ぬようになったので、この人間を救うために人間の体を受け取って人となり、肉体において苦しみ、死んで葬られましたが、神として復活したのです。聖書ははっきりとキリストは神であり、本当に神が人となってこの世に來たと宣言しています。この書物は人類に現れた神について書いています。恐るべき書物です。未来のことも書いています。しかし当時の人々もイエス様を単なる人間だと思って彼をあしらい、迫害しました。神を罵り、叩き、唾をかけ、服を奪い、あざ笑い、鞭で打ち、釘付け、脇腹を刺したのです。この方は、まるで地球の様に沈黙して人間の罪をすべて受け入れ、赦されます。昔も今も変わらないのです。人の罪は神の周りに渦巻いています。自然を破壊し、戦争を起こし、人を破壊します。イエス・キリストを歴史上の人物として研究しようと言う働きが今も神学校でされています。聖書の中に人間イエスを捜しているのですが、空しいことです。天使がはっきり言ったからです。神として読む時、聖書が伝えている意味がはっきり分かります。

では復活とは何でしょう。魂が肉体から離れて天に行く事ではありません。墓には遺体はなかったからです。魂と肉体が一体である人間の身体が、神と一体になって死なない身体に変容することです。人間は本来、死ぬようには造られていませんでした。命である神は命を造ったのであって死を創造しなかったからです。死は人間の罪によって始まりました。人間は毎日罪を犯しますし、毎日人は死んでゆくので、人間は罪を犯すことにも慣れ、死にも慣れてしまったのです。死は日常的なこと、当然なことだと思っています。死に麻痺したのです。しかしキリスト教は死は異常だと宣言します。神が創らなかつたものは必ず、この世から抜き取られます。だから死は必ずいつかこの地上から消滅します。聖書は約束し、預言します。「主はこの山で、すべての民の顔を包んでいた布と、すべての国を覆っていた布を滅ぼし、死を永久に滅ぼしてください。」(イザヤ 25 : 7~8) また死は神の敵です。「最後の敵として死が滅ぼされます。」(I コリント 15 : 26) とあるからです。神はこの死と真向から戦うために來たのです。人間の体を持たなければ死ぬことは出来ません。キリストは三日間だけ、死に支配されましたが、三日目に復活しました。キリストの神の命が死を飲み込んだ瞬間です。古代の聖土曜日の祈禱文はこう伝えています。

●今日、地獄は呻いてこのように叫びます。私は死んだ者の一人のように死者キリストを受け入れたので、私の権能は滅びた。あえてこの者を留めることができません。彼と共に私の権威の下にあった者を失った。私は古からの死者を持っていた。しかし、見よ。この者はすべての者を復活させた。主よ、栄光があなたの十字架と復活にありますように。

●言なるキリストよ、地獄はあなたを迎えて、死すべき者が神化され、釘の傷をう

けた者が全能者であることを見て、悩みもだえ、この恐るべき有様によって口がきけなくなりました。

●生命の河を流す神の優れた知恵キリストは棺に入って、命の及ばない所である地獄にいる者を生かしました。

神であるキリストは地獄や死を滅ぼすために、あえてその中に入っていかれ、内側からそれを破壊したのです。

③【ガリラヤで会える～初心に帰れ～】

天使は婦人に告げます。「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われていたとおり、そこでお目にかかれる。」(7) ガリラヤでイエス様は弟子たちを待つといわれました。ガリラヤとは地名であり、弟子たちがキリストと最初に出会って歩き始めた場所、物語が始まった最初の場所です。そこで待つとは、基本に帰れという事です。初心に戻ってもう一度新しくやり直せということを行っているのです。

復活祭までの 50 日間、長かったようであつという間に終わりました。私はこの 50 日間の祈りで、最初の日に、自分は魂の重病人なのに治療をしてこなかったことに気づきました。つまり神に本気で期待し、本気で祈って来なかったことに気づいたのです。しばらくすると、神の王国が本当にあるのであり、その国の王はキリストであって、私はこの王にお仕えしようという再献身の思いが強くなりました。目の前のベールが取り去られたようでした。丁寧に聖書を読み、耳でしっかり聞き、その一つ一つの言葉を地に落とさず、心に受け入れたからです。私たちはけっこう読んでいるように読んでいないし、信じているようで信じておらず、期待しているようであまり期待していないのです。つまり神の言葉として本気で聞いていないのです。最初の弟子たちとまったく同じです。イエス様の話を聞いているようで聞いていません。聞き流しています。しかし本気で聞き始めると、驚くべきことを発見するのです。だから天使は言ったのです。「ガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい」(ルカ 24 : 6)

●第二次世界大戦の時、ヒトラー暗殺に加担した罪で、ボンヘッファー牧師は絞首刑になりました。彼は「これが最後です。しかし私にとって命の初めです」と書き残しました。黒人解放運動をしたマルチン・ルーサー・キング牧師は暗殺される前日こう言いました。「私はあの約束の国を望み見た。…我々が一つの民として約束の国へたどりつけることを今夜、あなたがたに知って欲しい。それで、今夜、心うれしく思っている。私は何者も恐れない。私の目はすでに主の再臨の輝きを見たからである。」

パウロはこう言いました。「死は勝利に飲み込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」(I コリント 15 : 54～55) キリストは死のとげで刺されても復活しました。死は力を失ったのです。キリストの命の方が強く、大きく、輝くからです。死は私に何の力もないのです。キリスト

教徒はこのキリストを着ているのですから、強いのです。そこにキリスト教徒の喜びと希望があります。死の終わりを祝いましょう。死を恐れず、出かけて行ってキリストの不滅の命を多くの人に伝えてゆきたいと思います。